中日両国の近代化と魯迅・漱石

李　国　棟

相原和邦先生は私の恩師であり、私が北京大学大学院に在学した一九八三年以来、ずっと魯迅と漱石の比較研究について指導してくださった。この度、相原先生は広島大学からご退官なさるので、その記念として、また魯迅と漱石について最近考えたことを相原先生に報告する意味で本論を書かせていただく。

魯迅と漱石は中国と日本の近代が生み出した最大の文豪であり、彼らが生きていたのは、ちょうど中日両国の社会が伝統社会から近代社会へと転換するという過渡期であった。私は中日両国の近代化の過程に大変関心を持っているので、本論では、中日両国の近代化の過程との関わりにおいて魯迅文学と漱石文学の意義を確認してみたい。

一　中国の近代化過程

アジアの国にとって、近代化は西洋化を意味する。また時には、この西洋化は屈辱や苦痛を伴う。それでは、中国はどこまで西洋化されたのだろうか？その西洋化の過程はどのようなものであったのだろうか？そして魯迅は、どういう時点でどのようにこの近代化または西洋化の過程に関わってきたのだろうか？われわれはまずこれらの問題にはっきりと答えよう。

大昔から、中国人は「中華思想」という考え方を持っている。「中華」の「中」は「中央、真ん中」の意味である。「華」は「花」に通じていて、「きれい、美しい」の意味である。したがって、「中華思想」は、中国は世界の中心に位置していて、中国の文明文化は一番素晴らしいということを意味し、非常に傲慢な考え方だといえよう。

近世までは、中国は確かに世界の中心に位置していて、中国の文物制度、精神文明から物質文明までほとんど全てのものは世界では一番先進的で、レベルが一番高かった。こういうわけで、中国人は「中華思想」を持つようになったのだが、しかしこの考え方を持つ

と、どうしても排他的になる。精神文明の分野では自国のものが一番素晴らしいから、当然自国のものを採用し、外国のものを拒否する。物質文明の分野でも同じである。

中国人のこの思考様式または基本方針を、「中体中用」と呼ぶことができる。「体」は精神文明を意味し、「用」は物質文明を意味する。「中体中用」の基本方針は、すなわち物質文明の分野でも精神文明の分野でも、すべて外国のものを排除し、自国のものを採用するという方針である。近世までは、中国は一応このような基本方針で発展してきたのである。

しかし、近代に入ると、中国はこの方針を捨てざるを得なくなった。私たち中国人は、一八四〇年のアヘン戦争を忘れることができない。あの戦争までは、中国はすごく自惚れていて、自分は「中華」で、周辺は全部「蛮夷」だと考えていた。イギリスは「蛮夷」だから、戦争をしても簡単に勝てると思っていた。ところが、実際戦うと、自分の方がさんざんに負けてしまった。そして、負け戦はアヘン戦争だけではなかった。その後、その時代の「西洋列強」たちがみな中国に戦争をしかけた。中国政府は中華的な意識だから、相手をばかにしていた。しかし残念なことに、中国の方が全部負けてしまった。中国は連戦連敗をもって二十年間の歳月を過ごしたのであった。

今日の立場に立ってその二十年間を検討してみると、中国はずっと近代化、つまり西洋化を拒否していたと言えよう。近代化されたくなかった、西洋化されたくなかった。だから、それを拒否していた。しかし結局、拒否はできなかった。拒否できなかったので、最後に戦争を選び、戦争の形で最後の拒否を示したわけだが、戦争でも負けてしまった。このような近代化拒否が二十年間続いていたので、中国人はいくら傲慢であっても、やはりこの二十年間の事実を直視しなければならなかった。自分は頭の中では「中華」で一番素晴らしいと自惚れている。しかし、現実を見ると、そうではないのだ。アヘン戦争以後、中国は明らかに世界の中心の位置から端の方へ押しやられていた。中国人の頭の中の中国と現実の中国との間には、大きなギャップが現れたわけである。

では、当時の中国人はこのギャップをどのように解釈し、反省したのだろうか?当時の資料を読むと、こういう結論が出されている。戦争で負けたのは、物質文明の分野、とくに軍事産業が遅れたためだ。しかし、精神文明の分野では、全く問題がなかった。自国の伝統的な儒教、忠君愛国、賢人政治——賢人が政治を担当して、愚民たちを幸せの方向へと導いていくといったような独裁的な政治制度——などはやはり世界一のレベルであり、全然遅れていないと。当時、中国の政治家や有識者たちは最終的にこのような判断を下したのであった。

中国人の習慣的な言い方では、上述のような反省は「中体西用」

と言う。一八六〇年代に入ると、中国の基本方針はようやく、アヘン戦争前の「中体中用」からアヘン戦争後の「中体西用」へと変化した。非常に限定的な反省ではあるが、最終的には、中国人はやはりこの物質文明分野の遅れを認めた。遅れを認めたので、西洋から先進的なものを導入することが必然な成り行きとなり、当時、政府の要人をはじめ、中国の有識者たちは一斉に西洋の物を導入しようというキャンペーン「洋務運動」を起こした。西洋の事務をこれから積極的にする、つまり西洋から積極的に物を取り入れようということであった。この「洋務運動」は、一八六〇年代冒頭から一八九〇年代の半ばごろまで続いていた。その時の歴史を調べてみると、中国は毎年のようにイギリスを始めとした「西洋列強」から武器を買い入れたり、中国国内で西洋風の軍需工場や民需工場を造ったり、西洋風の軍事学校も設立した。

このような時代は「中体西用」の時代だと考えていいわけだろう。当時の中国人は、せいぜい物質文明だけの遅れなので、武器を買い入れて、同じような工場を造ったら、すぐに西洋に追い付くだろうと判断した。しかし、その判断が甘かった。中国人の夢は実現しなかった。日本と大きく関わる大事件「日清戦争」が起こった。

一八八〇年代から、中国は西洋に倣って近代的な海軍をつくった。だいたい同じ時期に、日本も「明治維新」の勢いに乗って近代的な海軍をつくった。そして、一八九四年に、両国がとうとう衝突した。戦争前、中国は日本を見くびっていた。しかし、戦争が始まると、自分の方が負けた。しかも中国の北洋水師が全滅するほどさんざんに負けてしまった。だから、これはいったいなぜだろうと、中国の有識者たちはもう一度反省しなければならなかった。

表面的には、中国の敗戦はただ武器の遅れによるものだと考えられる。つまり、日本も中国もみな外国から軍艦を買っているけれども、日本の軍艦は最新式の軍艦で、中国の軍艦はボロボロの時代遅れの軍艦だった。最新式の軍艦と時代遅れの軍艦が戦ったのだから、中国の方が当然負けるという結論であった。この結論は確かに理路整然としていて、ある程度の説得力もあったが、しかし実際、軍艦の優劣は決して根本的な敗因ではなかった。なぜなら、中国も最新式の軍艦を買えばよかったのに、なぜ当時の中国政府はそれを買わなかったのだろうか？われわれは当然こう質問したいのである。

歴史を調べてみると、実は理由があった。海軍の予算はある。しかし、上層部はその予算を流用した。流用した人は、すなわちあの悪名高い西太后である。西太后は海軍の予算で軍艦を買わずに、北京で広くて立派な庭園を造った。その庭園は現在でも残っている。つまり北京市の西北方向の「頤和園」である。西太后は「頤和園」を造って最新式の軍艦を買わなかった。その結果、中国は日清戦争で負けた。「洋務運動」だけではだめだ、ただ西洋から物を取り入れるだけでは、中国は決して強くなれないと、中国人は「日清戦

争」を経験してようやく分かった。それで、中国の有識者たちはもう一度反省を始めた。

今度の反省は精神文明の方にメスを入れた。自国の政治制度、つまり西太后をはじめとした独裁的な政治制度にも問題があり、それをある程度改革しなければならないと考えたのだ。すると、次のキャンペーン「戊戌維新」が起こった。「戊戌維新」は日清戦争の三年後に起こり、その目的は日本に学ぶということだった。日本のように若い皇帝を擁立して、西太后を軟禁するというクーデターも計画したが、残念なことに、このクーデターは途中でばれてしまい、若い皇帝の方が逆に軟禁され、西太后は一人で全権を握るようになった。中国はようやく良い方向へと動こうとしたが、結果を出せず、「戊戌維新」は失敗に終わった。

この政治改革の試みも失敗したので、中国の有識者たちはさらに別の方向を模索した。西太后はすべての実権を握っているから、改革だけではどうしようもない。いっそのこと西太后の政権を打倒しよう、革命を起こして完全に清王朝を打倒しよう、と有識者たちは団結して行動を起こした。その結果、孫文が「辛亥革命」を成し遂げた。この「辛亥革命」によって、中国の歴史から皇帝が消えた。しかし、「辛亥革命」はただ皇帝を打倒しただけで、精神文明の分野ではほとんど何もできなかった。そこで、中国の有識者たちはさらに反省を続けた。

時代はすでに一九一〇年代に入り、外国から多くの留学生が中国に帰ってきた。その留学生たちが中心となって「新文化運動」、つまり儒教などの伝統思想を捨てて、西洋の個人主義思想や民主主義政治制度などを全般的に導入しようというキャンペーンをやり出した。一九一五年から一九二二年まで、北京を中心とした中国の都市部は「新文化運動」に燃えていた。

論理的に見ると、この「新文化運動」は中国の近代化の過程における当然の結果である。中国は最初は、近代化または西洋化を拒否しようとした。拒否できないことが分かってから、物質文明だけの近代化をやった。それがうまくいかなかったので、精神文明の分野でも少し改革をしようと試みたが、またうまくいかなかったので、革命を起こした。ところが、革命は皇帝を打倒しただけで思想や文化などを新しくすることが全くできなかったので、今度は中国の伝統思想を捨てて、西洋の近代思想を導入しようと、西洋の近代をよく知っている帰国留学生たちは「新文化運動」を起こしたわけである。

「新文化運動」のスローガンは「全盤西化」、つまり「全面的西洋化」である。物質文明の分野だけではなく、精神文明の分野でも西洋化を推進する。そうでなければ、中国は間違いなく滅ぶと、帰国留学生たちはこういうふうに主張していた。そしてこの時、魯迅は登場した。「新文化運動」の一員として登場したのである。

魯迅は一八八一年に生まれ、一九〇二年に日本へ留学し、日本で

西洋に接した。そして、一九〇九年までずっと日本で生活していた。その後、中国にもどって中学校の先生をしたり、文部省に入って課長を務めたりしていた。魯迅の友達の多くは帰国留学生であり、当時は北京大学の教授になって一生懸命「新文化運動」をやっていた。こういう環境なので、友達から誘いが自然に来た。「あなたは暇でしょう。新文化運動に参加したらどうか。あなたは文筆がうまいから、小説でも書いたら」と勧められた。そこで、魯迅はペンを握った。最初に書いたのが、短編小説『狂人日記』であった。

『狂人日記』は、完全に西洋の近代小説を基準とした小説である。中国の伝統小説とは様式も内容も全然違っている。ここには、魯迅の小説、あるいは「新文化運動」の意義が見られる。その時、中国人はやっと精神文明の分野でも自分の遅れを認めた。少なくともインテリたちは認めた。認めた以上、当然西洋に学ぶ。だから、魯迅は西洋の近代小説の様式を学んで、中国の最初の近代小説『狂人日記』を創作したのであった。

以上は中国の近代化の過程に関する概観であるが、今日の立場に立ってもう一度整理してみると、中国の近代化の過程はかなり論理的に展開しているように思われる。最初は近代化の拒否でアヘン戦争をした。それから、近代化拒否から物質文明だけの近代化へと変わり、「洋務運動」をやった。その後、さらに政治制度を近代化する「戊戌維新」を試みたが、それも失敗に終わったので、今度は精神文明の近代化がポイントとなった。そこで、「新文化運動」が起こった。そしてこの時、魯迅は中国の近代化の過程に関わるようになった。魯迅はこの時に加わったのだから、その考え方が当然「新文化運動」のほかの人と同じく、「全面的西洋化」を主張するものであった。魯迅の小説がその証拠である。

二　魯迅の主張

具体的には、魯迅は何を主張していたのだろうか？　一九一八年に創作された『狂人日記』から少し引用してみよう。

> ものごとは、なんでも研究してみなければ。研究すればわかって来る。古来よく人を食ったことは、おれの記憶にもあるが、あまりはっきりしない。歴史を開いて調べてみる。この歴史には年代がなく、どのページにも歪んだいびつな字で「仁義道徳」といった文字が書いてある。どうせ眠りつけないので、夜なかまでかかってくわしく調べてみると、やっと字のすき間から字が見えてきた。本のいたるところに二つの文字が書いてある。「食人」だ！（第三章）

『狂人日記』の主人公は狂人である。魯迅は狂人の口をかりて儒教を批判し、儒教に支配された中国のすべての歴史を否定してい

る。魯迅から見れば、中国の四千年の歴史はすべて悪の歴史で、全部否定すべきだ。その歴史には年代がないが、どのページにも「仁義道徳」が書いてある。「仁義道徳」は儒教の建前で大変立派なように見えるが、よく見ると、字の隙間から本質的な文字が現れた。つまり「食人」、人を食うことだ。

「食人」は人間の個性を抹殺するという意味で、魯迅はここで、中国は集団主義の儒教を捨てて、西洋の個人主義を導入しなさいと主張しているのである。もちろん、周りの大人を見れば絶望してしまう。みんな儒教的な意識を持っている。しかし、子供なら、まだ希望が持てる。『狂人日記』の最終段落で、魯迅はこう書いている。

人を食ったことのない子供は、あるいはまだいるだろうか？
子供を救え……（第十三章）

子供はまだ儒教に毒されていないから、どんどん西洋の個人主義で教育しなければならない。これはすなわち魯迅の希望であった。要するに、魯迅は全面的西洋化を主張していた。しかし、「新文化運動」自体は一九二二年を境目に下火になり、インテリたちのグループが解散してしまい、魯迅自身も悩み始めて、これによって、魯迅の文学は中期に入った。一九二四年に創作された短篇小説『酒楼にて』には、二人の人物が登場しており、一人は語り手で、もう一人は主人公である。この二人は昔からの友人であり、今、故郷で久しぶりに再会し、それぞれの現状についてこう話し合っている。

「君は『子曰く、詩に云う』を教えているのか」、私は不審に思ってたずねた。

「むろんさ。ＡＢＣＤでも教えていると思ったのか。はじめは生徒は二人で、一人は『詩経』、一人は『孟子』だ。最近一人加わったが、女だから、『女児経』ってわけだ。算数さえ教えない。僕が教えないんじゃなくて、連中がいらないと言うのさ。」

ここには、一つの対立がある。一方は「子曰く、詩に云う」である。「子曰く」の「子」は孔子を指し、「子曰く」は『論語』によく用いられた言い方である。「詩に云う」の「詩」は『詩経』を指す。だから、「子曰く、詩に云う」は完全に伝統文化を意味している。しかし、その対極となっているのは「ＡＢＣＤ」である。「ＡＢＣＤ」は西洋の近代文化を意味している。魯迅の友達は、昔はみな「ＡＢＣＤ」のような考え方であったが、今となっては、一部の人は「ＡＢＣＤ」を捨てて、逆に「子曰く、詩に云う」を教えるようになった。大きく変わったのだ。

このような小説には、無力感が漂っていて力強さがない。深い失望や絶望が伝わってくる。一九二五年の元日に、魯迅はまた『希

望』と題する散文詩を創作した。その一部を引用してみよう。

わたしの心はいつになくさびしい。しかし、わたしの心は安らかである。愛憎もなく、哀楽もない。それに色彩と物音もない。

（中略）

希望とはなにか。それは娼婦だ。
誰にでも媚びを売り、すべてを与え、
君がたくさんの宝物――君の青春を
みついでしまうと、君を捨てるのだ。

（中略）

絶望が虚妄であるのは、希望とまったく同様だ。

一九二五年の元日、この一番希望に満ちた日にちなのに、希望がないと魯迅は書いている。希望は何かというと、娼婦だ。魯迅は喪失感を持っているわけであるが、数年前まで一生懸命主張したことは、今はもう幻のように消えてしまった。今、周りには何もない。愛憎もないし、哀楽もない。静かで寂しい。

一九二五年の時点で、魯迅は「絶望が虚妄であるのは、希望とまったく同様だ」と言っていた。魯迅は最初は希望を持っていた。中国に西洋の個人主義を導入したら、中国はきっと強くなるだろうと希望に燃えていたが、数年後、この希望を捨てた。希望を捨てた時に、せめて絶望ぐらいはまだあるだろうと思ったが、二五年になると、絶望さえないと分かった。希望もないし、絶望もない。だから、「絶望が虚妄であるのは、希望とまったく同様だ」と言っているわけである。絶望は希望と同じくそもそも無い物だとすれば、いったい魯迅にとっては、何があるのだろうか?虚無である。一九二五年以後、魯迅は虚無の方へと突き進んでいった。

実は、魯迅は自分のこういう気持ちをもう一度公表している。二五年ごろ、魯迅はすでに有名人となったので、ある日、ある新聞社からアンケートが来た。青年に有益な本を薦めなさいと。魯迅はその時に奇抜なアンケートを出し、後でそれが新聞に発表された。今後、中国の青年は中国の本を読むな、外国の本を読みなさいという主旨のアンケートであった。

以上、魯迅文学の中期を概観してみたが、このような中期からさらに発展して、晩期に入った時、魯迅の小説は完全に変わった。彼は西洋近代小説の様式を完全に捨てた。その代わりにもう一度中国の昔のお話のような様式を取り入れた。小説の題材から見てもその変化が大きく、晩期の魯迅はもう現実社会から取材しなくなり、古代の神話伝説をアレンジしてお話を作るようになった。

魯迅はつまりこのように中国の近代化に関わってきて、そして、近代化の中で彼自身も大きく変化してきたわけであるが、魯迅の変

化過程を見て、今日のわれわれはいったい何を指摘することができるのだろう？

まず第一点、魯迅の主張の時代的論理性を指摘することができる。中国の近代化という枠の中で魯迅文学を考えると、それがはっきりと分かる。中国の近代化はアヘン戦争をきっかけに器物の模倣から始まっている。「洋務運動」は器物の次元で近代化を進めていたわけであるが、器物の次元だけでは足りないから、中国の近代化は政治改革や革命の方向へと発展した。しかし、政治改革と革命がうまくいかなかったので、さらに思想啓蒙の方向へと突き進んだ。魯迅はつまりこの三段階の中の第三段階に登場し、思想啓蒙の役割を果たしたのである。

もう少し魯迅以後のことについて考えてみたいが、魯迅以後のインテリの代表を一人あげるとすれば、私は毛沢東をあげる。毛沢東自身は魯迅が大好きで、「私は魯迅の小説を読んで育ってきた」と言っている。魯迅たちの思想啓蒙も結局徒労に終わったので、毛沢東を代表とした次世代のインテリたちは、ついに農民蜂起という方法を選択した。そして、一九四九年十月、毛沢東はついに成功し、社会主義国家中華人民共和国が成立した。中国の近代化の方向性を考えるときには、われわれはまず魯迅までの論理性を見通すことができる。さらに一人付け加えるならば、毛沢東までは論理的な展開をしているように思われる。これが第一点である。

二点目は、中国の問題点が浮き彫りになったということだ。つまり、精神文明の近代化が中国ではなかなか実現できないということが分かった。「洋務運動」から中国は一応西洋から物を導入したが、しかし、精神文明の遅れを認めてはいなかった。あとで政治改革の方向へと方向転換をはかったが、失敗してしまった。その後、インテリたちは政治改革の方向を捨てて、「全面的西洋化」といって精神文明の西洋化を主張するようになったが、中国の儒教的文化伝統は彼らの主張を否定し、中国は相変わらず「中体西用」の道を歩み続けていた。つまり、中国の近代化は「中体中用」から「中体西用」へと転換することはできるが、「西体西用」へは決して行かない。中国の長い歴史が負担になっている。儒教はすでに二五〇〇年の歴史を有しているから、儒教を捨てて個人主義を導入する、儒教的な政経システムを捨てて民主主義政治制度を導入する――この転換はなかなか成し遂げられないのである。

こういうわけで、中国の精神文明の近代化はなかなか実現できない。今日でも出来ておらず、中国は相変わらず精神文明の分野では西洋を拒否している。中国政府とアメリカ政府は毎年人権や民主主義をめぐって喧嘩している。アメリカの言い分では、民主主義は普遍的な原理だから、中国も導入しなさい、導入すべきだと。しかし、中国政府は、とんでもないことだ、中国には民主主義が合わないと反論し、中国には中国の道があり、やはり儒教的な忠君愛国、

賢人政治の方がいいと考えている。ましてアヘン戦争以来、中国は一度も自国の精神文明の遅れを認めたことがないから、民主主義に関する中国政府とアメリカ政府の喧嘩は出口がないだろう。永遠に喧嘩していくかもしれない。

実は、この点は、魯迅文学を読むとよく分かる。魯迅は「全面的西洋化」を主張していた。漢字を捨てようとまで主張していた。漢字にはすでに儒教が入っているから、漢字を捨てて、ローマ字を書いた方がいいと考えたが、結局、儒教の前では全く効果がなかった。この意味では、魯迅の一生は本当に悲劇的であったと言えよう。

魯迅は中国の大文豪である。魯迅に相当する日本の文学者は、夏目漱石である。魯迅と漱石は両国の英知であるという点では共通しているが、しかし彼らの作品を読むと、彼らの主張は全然違うのではないかという印象を受ける。

三　日本の近代化過程

漱石の作品を分析する前に、まず日本の近代化の過程について概観してみよう。

日本の近代化の過程は中国と似ている。アジアの国だから、当然な運命であろう。江戸時代には、日本は鎖国政策を取っていた。もともと日本の文化伝統はすごくオープンであり、外国のいい物を積極的に導入してきたが、江戸時代に入ると、鎖国になった。なぜかというと、やはり儒教のためだと私は思う。儒教は江戸時代に入ると官学となった。儒教は中華的であるから、儒教的な考え方を持つと、人間はどうしても排他的になり、自惚れてしまう。多分江戸幕府はこのような自惚れの中にいたであろう。だから、外国の船が来たら、打ち払ったのである。「一途に打払」、「無二念打払」、何も考える必要はない、ただ打ち払うだけでいい、と江戸幕府は一八二五年に各地の大名に命令した。その時、アヘン戦争はまだ起こっていなかったので、日本の幕府は中国政府と同様な考え方を持っていたのであった。

しかし、一八五三年になると、状況が一変した。ペリーの黒船がやってきた。日本の幕府に、ペリーは開国貿易の要請書を出すとともに、降伏を意味する白い旗も渡した。つまり、降伏しなさい、降伏して僕らと貿易しなさい、そうしないと、君らを殺すぞと言う意味であった。これはまさに西洋列強の論理である。西洋列強はアジアの国に対して、全部こういう態度を取っていて、中国に対しても同じであった。僕らと貿易しなさい、そうしないと大砲でやるぞと。やり方は全く同じであったが、しかし、日本の幕府は中国政府より対応がうまかった。まず一年ぐらい待ってくださいと一年間の猶予をもらって、その後いろいろ考えて、どうしても拒否できないと判断したときに、進んで「日米修好通商条約」を結んだ。もちろん、この条約はアメリカに有利な不平等条約である。しかし、中国

のアヘン戦争と比べたら、よほど幸せであった。条約を結ぶ時には、天皇の許可がなかったので、一時日本国内が混乱になったが、しばらくすると、混乱が収まり、「明治維新」が成功した。

「明治維新」の直前、明治天皇が京都御所の紫宸殿で「五箇条基本方針」を決める場面があった。この「五箇条基本方針」の決定は非常に重要だと私は思う。中国の基本方針は「中体中用」と「中体西用」だから、悲惨な歴史をたどったが、明治天皇の基本方針は全く違っていた。その第四条と第五条を確認してみよう。

第四条「旧来ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クヘシ」
第五条「知識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スヘシ」

ここの「旧来ノ陋習」は江戸時代の鎖国政策を指す。「明治維新」後、日本は本当に鎖国政策を「旧来ノ陋習」として捨てた。そして捨ててから、「知識ヲ世界ニ求メ」、国を開いた。明治時代の「文明開化」、全面的に西洋に学ぶという政策は、もともとここに源を発しているのである。

私はいつも思うが、もし「洋務運動」の段階、つまり一八六〇年代から中国も「文明開化」の政策を取っていたら、結果は全然違っていたであろう。日本は「文明開化」の政策を実施すると、短期間で近代化を実現した。断髪令、洋式礼服、太陽暦、廃仏毀釈運動、廃藩置県、四民平等、工場払下げ概則、日本銀行、刑法、内閣制、大日本帝国憲法、帝国議会、教育勅語、民法。——風俗から政経システムまでの一連の大改革は、二十三年間だけで完成され、日本が非常に遅れた封建的な国家から近代国家に変身することができた。もちろん、文化の面では自国の文化を取捨選択なしに捨てたので、多くの文化人の反感を引き起こし、文化人たちは「文明開化」はだめだ、でたらめだと批判していた。しかし、当時の状況を考えると、こうしなければ、日本も中国と同じく植民地にされてしまったであろう。だから、弊害が大きいけれども、このような「文明開化」があってはじめて、日本は西洋列強の植民地にされずにすみ、しかも、速いスピードで近代国家になれた。当時の言葉で言うと、日本は「文明開化」によって「一等国」の仲間入りを実現することができた。一等国、二等国、三等国、多分当時の中国はその次の四等国か五等国だったかもしれない。しかし、日本は「一等国」となった。これが「文明開化」の成果である。

もちろん、この時点では、漱石はまだ日本の近代化に関わってきていない。漱石は一八六七年に生まれ、幼い時から漢文の影響を受けていた。そして、十五歳の時に西洋風の中学校を中退して漢学塾に入った。それから、また英語塾に入り、英語を勉強して東大に入学した。卒業後、しばらく教師をしてから、イギリスへ留学した。漱石はこういう履歴の持ち主である。イギリス留学までは小説家と

して活躍することはたぶん思ったこともないだろうが、イギリスから帰って東大の講師をした時に、誘いがあった。この点では魯迅と似ている。漱石は友人から誘われて、小説を書き始めたわけで、その第一作は『吾輩は猫である』である。これは明治三十七年のことで、当時、漱石は三十八歳である。『狂人日記』を書いた時、魯迅は三十七歳である。三十七歳、三十八歳という同じような年齢になった時、二人の大文豪は文学に関わってきた。そして、文学を武器として自国の近代化を批判し始めた。

四　漱石の主張

『吾輩は猫である』は混沌とした小説であり、はっきりした傾向が出ていないが、その次の小説『坊つちゃん』には、はっきりした傾向が現れた。『坊つちゃん』は面白い。お話のようなもので言葉の調子もいい。しかし実は、それは単なるお話ではない。人々を考えさせるテーマが含まれている。主人公の坊っちゃんは江戸っ子である。その友達の山嵐は会津出身である。坊っちゃんの敵は赤シャツで、赤シャツは西洋にかぶれていて、「文明開化」の代表である。赤シャツの友達野だいこも西洋の絵画に詳しい西洋かぶれの人である。『坊つちゃん』には、こういう二つのグループの対立が描かれているのである。

この対立については、もちろん最後は坊っちゃんたちが勝った。赤シャツらを殴って勝ったのだが、しかし彼らの喧嘩には、漱石独自の意味づけが含まれている。江戸っ子と会津出身は全部江戸時代を意味する。白虎隊は最後まで近代を意味する明治を拒否した。つまり、坊っちゃんと山嵐は本質的には前近代を代表している。その対極には、「文明開化」または近代を代表する赤シャツと野だいこがいる。こうなると、前近代と近代が戦っているわけであり、どちらが勝つかというと、漱石は前近代が近代に勝つという結論を出した。もちろん、現実は違う。現実においては、近代が前近代に勝っている。しかし、小説の上では、漱石はあえて前近代が近代に勝つようにしているのである。

漱石の初期の作品から、もう一例「文明開化」を批判する例をあげる。『野分』という小説があるが、その中では、漱石は主人公の口をかりて次のようなことを言っている。

> 英国風を鼓吹して憚からぬものがある。気の毒な事である。己れに理想のないのを明かに暴露している。（中略）奴隷の頭脳に雄大な理想の宿りやうがない。西洋の理想に圧倒せられて眼がくらむ日本人はある程度において皆奴隷である。（第十一章）

つまり、「文明開化」の時代において、日本人は全部「奴隷」である。自分の理想を持っていない、自分の個性を持っていない、主

体性を失っている。実際、「奴隷」という言葉は、魯迅もよく使っていた。中国人は全部奴隷だと魯迅は言っている。魯迅と漱石の自国の現状に対する認識は本当に似ているのである。

漱石の初期の小説は前近代の倫理道徳で「文明開化」、つまり日本の近代化を批判している。そして、このような内容に相応する形で、初期小説の様式も前近代的である。西洋の近代小説の様式はほとんど使われていない。近代的な様式はただ一つ使われている。つまり「一人称」である。一人称の小説が江戸時代まではなかった。小説はお話だから、三人称で書く物で、一人称で書く物ではなかった。中国も同じであった。魯迅の『狂人日記』までは、一人称主人公の小説はほとんどなかった。魯迅は西洋の近代小説から一人称を借りて、儒教を批判する狂人というイメージを作り出している。一人称は作者自身の主張をよく表現できるから、自国の現状に不満や危機感を感じ、それを改造しようとした魯迅と漱石はまずこの様式を借りた。しかし、漱石の初期の小説を考察してみると、「文明開化」の批判を目的としたこの「一人称」を除いて、ほかに近代小説の様式が用いられていないのである。

初期は上述のようであるが、中期に入ると、変化した。『三四郎』『それから』『こころ』のような小説は、すでに『坊つちゃん』と異なっている。『三四郎』などは、西洋近代小説の心理描写を借りて創作した、非常に西洋的な小説なのである。

様式が変わると、漱石自身の主張も変わった。中期の主人公たちはまず『坑夫』『三四郎』あたりから迷い始めた。坊っちゃんなど初期の主人公たちはみな自分の立場があって、自分の立場、自分の主張を最後まで貫いている。しかし、中期の主人公たちは迷い始めて、自分らしい主張はできなくなった。『それから』の主人公代助は最後に、自分の立場を失って激しく動揺している。『こころ』の主人公「先生」は動揺しているうちに追いつめられ、「私の活動をあらゆる方面で食ひ留めながら、死の道丈を自由に私のために開けて置くのです」(『こころ』下篇第五十五章)といって自殺してしまった。

漱石はなぜ動揺したり、自殺したりする主人公を描かなければならなかったのだろうか?これは当然漱石自身の失望や絶望、あるいは漱石自身の心理的動揺に関わっている。中期の漱石は、すでに初期の『坊つちゃん』のように自分の主張を貫き通すことができなくなり、ある程度現実社会と妥協せざるを得なくなった。もちろん、喜んで妥協したわけではない。しかし、妥協しなければ、死ぬより外に道がない。漱石の中期の小説はこのようなメッセージを伝えている。だから、漱石の中期は暗いのである。

しかし、晩期に入ると、明るさがもどってきた。『明暗』がその例である。『明暗』が未完の作品である。もし漱石はその時点で亡くならなかったら、それまでと全く違う小説を書くことができたと

思う。『明暗』の主人公津田はサラリーマンである。『明暗』を除いて、漱石の小説にはサラリーマンの主人公がいない。プライドの高いインテリばかりである。しかし、最後の小説『明暗』は異なっている。

津田は全然絶望していない。だから、『明暗』は中期の小説よりずっと明るい。もちろん、心理的なドラマであるから、どろどろの部分はある。しかし、全体的には明るさが回復されている。この変化から判断すれば、漱石はもう少し生きていたら、やはり近代化の方向へと近づいて行ったことだろう。初期では「文明開化」を断固として拒否していたが、晩期に入ると、やはり「文明開化」と妥協して、「文明開化」の現実を認めた上で日本人の主体性を追求する傾向が現れた。ただ残念なことには、漱石は『明暗』を書く途中、突然亡くなった。

以上は漱石文学の変遷の軌跡であるが、この変遷軌跡は、日本の近代化の過程と密接に関わっている。

まず、漱石の主張の時代的論理性について考えてみよう。日本の近代化の過程は中国と似ている。最初はペリー艦隊を拒否しようとした。近代化されたくない、西洋化されたくないと拒否しようとした。中国でいうと、アヘン戦争の段階にあたる。しかし、しばらくすると、それが拒否できないと悟ってそれを受け入れて、「明治維新」を成し遂げた。「明治維新」は中国の「洋務運動」と違って、全面的に西洋に学んでいた。中国のように物質文明と精神文明に分けて物事を考えるという拘りがなかった。だから、日本は一気に全面的西洋化の方向へと進んでいって、速やかに近代国家を作り上げることができたのである。

もちろん、この全面的西洋化の方向へと社会全体が動き出した時、上滑りといったような弊害も現れた。実は、漱石は年齢的にはちょうど「文明開化」の弊害が噴出した時に成人して、その弊害をはっきりと見た。すると、このままでは、日本は滅ぶのではないかと心配して、「文明開化」の批判を始めた。もっとも、漱石には「文明開化」を批判する理由がもう一つあった。漱石はイギリスへ留学した時、イギリス人からばかにされていた。当時、アジアの人は西洋の最も近代的な国へ行ったら、どうしても虐めを受けてしまう。イギリス人に虐められると、漱石は「私は一個の独立した日本人であって、決して英国人の奴婢でない」(『私の個人主義』)と反発した。彼のプライドは随分傷つけられたと推察できる。だから、イギリスから帰ると、どうしても「文明開化」を批判したくなり、「自己本位」を主張するようになった。漱石はつまり「自己本位」の立場に立って小説を創作し始めたのであるが、ただ創作しているうちに、漱石の立場は「自己本位」から「則天去私」へと変わっていった。「則天去私」の本質は、「文明開化」との妥協だと私は思う。もちろん、「自己本位」は理想的である。しかし、「文明開化」の時代

に「自己本位」を堅持するのはとても困難であった。私の考えでは、「自己本位」の小説は初期までである。『虞美人草』までは一応「自己本位」の小説だと言える。しかし、中期に入ると、小説は動揺するようになった。そして晩期には、さらに妥協的な「則天去私」に変化した。要するに、漱石の主張がこのように変遷しているのは、日本の近代化の急激さによるもので、この変遷には、時代的な論理性がはっきりと認められるのである。

二点目は、日本の近代化の問題点、つまり「自己本位」の実現が非常に難しいということが浮き彫りになった。日本の主体性のなさを批判する文化人は漱石だけではなく、そのほかにもたくさんいる。今日もいる。日本は独立していない、完全にアメリカの属国だ、なぜアメリカにはノーといえないのかなどと、多くの文化人は指摘している。これは一つの現象として、漱石以来ずっと続いている。しかし、日本の政治的、経済的、地理的諸条件から考えると、漱石たちが考えた「自己本位」の実現は非常に難しいと言わざるをえない。私は不可能だと思う。

これは、日本の文化伝統にも関わっている。日本人は遣隋使、遣唐使の時代からずっと積極進取の精神を持っている。日本には、外国にいいものがあったら、すぐにそれを導入するという文化伝統がある。この文化伝統を考えて、さらに現在の諸条件と結びつけて推測すると、これからも、日本国は漱石たちが考えたような「自己本位」を実現することができないだろう。漱石文学の「自己本位」から妥協的な「則天去私」への変遷軌跡は、すでに「自己本位」の実現が不可能であることを示しているように思われる。

要するに、魯迅と漱石はそれぞれ高い見地から自国の近代化の問題点を鋭く指摘している。そして彼らが指摘したそれぞれの問題点は、今日でも未解決のままである。魯迅文学と漱石文学の変遷軌跡から見ると、彼らは晩年自国の未来に相当失望したようである。しかし、彼らの文学作品は彼らの失望以上に、彼らの祖国の現在や未来に対する憂慮と使命感を今日のわれわれに伝え、今日のわれわれはそれを確認する過程において自国の近代の本質を認識し、自分自身の責任を自覚する。ここには、魯迅文学と漱石文学の最大の意義があるのである。

付記：

魯迅の小説の引用は、いずれも『魯迅全集』（学習研究社、一九八四年十一月～一九八六年八月）による。

漱石の小説の引用は、いずれも『漱石全集』（岩波書店、一九九三年十二月～一九九七年十二月）による。

―り・こくとう、本学大学院文学研究科外国人教師―